

ヨーロッパ・ツアー現地演奏会評(1)

「N響ヨーロッパ公演2020」の中から、2月24日に行われたロンドン公演について、現地メディアによる演奏会評をご紹介します。

The Arts Desk

Tuesday, 25 February 2020

Gavin Dixon

透明さと力動感

一強力な首席指揮者率いる日本を代表するアンサンブルが透明性と明瞭さをもたらした

この演奏会は、NHK交響楽団のヨーロッパ・ツアーのイギリス公演である。この東京の放送交響楽団は日本を代表するアンサンブルで、活況な日本の音楽文化、演奏の正確さ、明瞭な音色の見事な代弁者だ。首席指揮者を務めるパーヴォ・ヤルヴィは、このオーケストラの音色にぴったりと合った指揮者で、同様に明瞭な、また表情深く、しかし決して外向的になりすぎないアプローチを取っている。つねにオーケストラの揺るぎない結束に頼りながらも、しばしばクライマックスを荒々しく駆り立てる彼は、音楽の劇的展開にも敏感だ。ジェスチャーを最小限に留めつつ、全体的な流れではなく個々のフレーズに集中し、細部に渡って目を行き届かせる傾向がある指揮者である。しかし、機械的なものや陳腐なものはどこにもない。音楽は常にヤルヴィの指揮のもと、自由に息づいていた。

今回のプログラムは、1991年に作曲された武満徹の後期作品、《ハウ・スロー・ザ・ウィンド》で幕を開けた。室内オーケストラのために作曲されたこの楽曲は、動機が繰り返し、様々な雰囲気や装いを纏いながら演奏家の間を絶えず渡っていく作品である。ドビュッシーから一歩だけ進んだような感じを受ける様式だ。和声は不協和ではないが曖昧で、リズムは常に流動的だが穏やか。しかしヤルヴィは各フレーズを厳格で明確に保つ、より儀式的な側面をとっていた。NHK交響楽団の弦楽器の音色は、武満作品にとって特にかげがえのない、明晰で軽い音質をもっており、テクスチャに優雅な透明感を与えており、木管楽器とパーカッションの独奏群にもよくマッチしていた。

シューマンの《チェロ協奏曲》のソリストはソル・ガベッタ。彼女の抑制された情熱はNHK

交響楽団のサウンドにぴったりだった。ガベッタは、特に低弦ではつややかで表現豊かな音色を湛える演奏家である。シューマンの叙情的な旋律の中で、彼女はしばしばフレーズの最初で弦楽器群の中を深くえぐっていくが、それから夢のようで靄がかかったようなカデンツへと向かっていく。オーケストラは同様に抑制され、ミニマルなデュナーミクと、ためらいがちで穏やかな表現を伴っていた。ガベッタが演奏全体を牽引するのに十分なカリスマ性を兼ね備えているので、これで十分なのである。アンコールで演奏された風変わりなヴァスクスの《ドルチッシモ》は、2016年のプロムスの初夜のアンコールですでに聴かれた作品だったが、二度目でもその目新しさを保ち続けていた。

透明感や抑制といった性質はラフマニノフにはあまり適さないものだ。したがって、曲目の最後を飾った彼の《交響曲 第2番》はそれ以上のものを必要とする。ヤルヴィにとってこの楽曲のサウスバンク・センターでの演奏機会は、去年月のフィルハーモニア管弦楽団との共演以来、ここ一年あまりで二度目である。テンポは全体的に闊達で、しばしば激しいアゴーギグの力を伴ってクライマックスが構築されたが、テクスチャは常に明瞭で、バランスは注意深く判断されていた。ヤルヴィはロマン派の大規模交響曲に対する良い感性を持ちあわせた指揮者である（彼らはこのツアーの別の公演でブルックナーの《交響曲 第7番》を演奏する）。しかし、そのことは楽章の冒頭からははっきりわからない。第1楽章と第3楽章（アダージョ）の両方の冒頭部は、平坦で抑揚のない感じを受けた。しかし、そのどちらの楽章でも、ヤルヴィは音楽を次第に高揚させ、アンサンブルからかつてないほどの色彩と豊かさを引き出していた。アダージョでは、松本健司（原文では伊藤圭だが、正しくは左記）による魅惑的で豊かなクラリネットのソロに助けられている部分もあった。

この楽章の巨大なクライマックスは、やや不釣り合いに感じられ、堂々たる頂点の駆り立てられるような激しさは、まるでヤルヴィと演奏者たちがブルックナーのことを考えているようですらあった。より良いものに聞こえたのは、第2楽章のスケルツォである。デュナーミクが最高潮になった箇所ですら、オーケストラの明瞭なアタックと透明なテクスチャが音楽を牽引していた。ヤルヴィは最終楽章で再びテンポの推進力を駆り立てていたが、低音の管楽器が重さを、木管楽器が疾走するような推進力を与え、管弦楽の壮麗さもまた引き立っていた。速いテンポがときに音楽の荘厳さを損なってこそいたものの、ヤルヴィはその代わりに力動感と劇的展開をもたらし、彼の劇的な感性が最後のページの歓喜をもたらしていた。